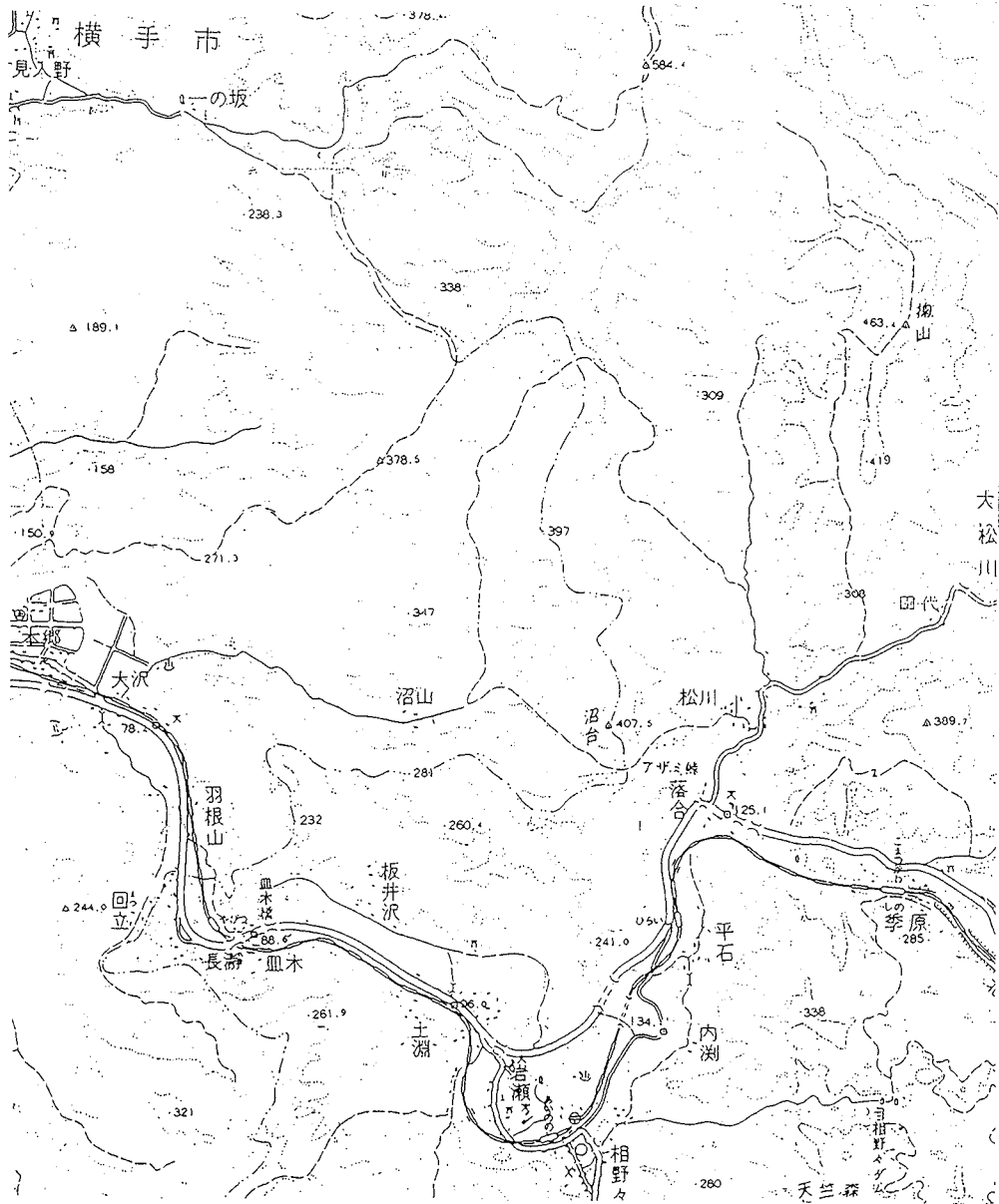


(3) 沼山

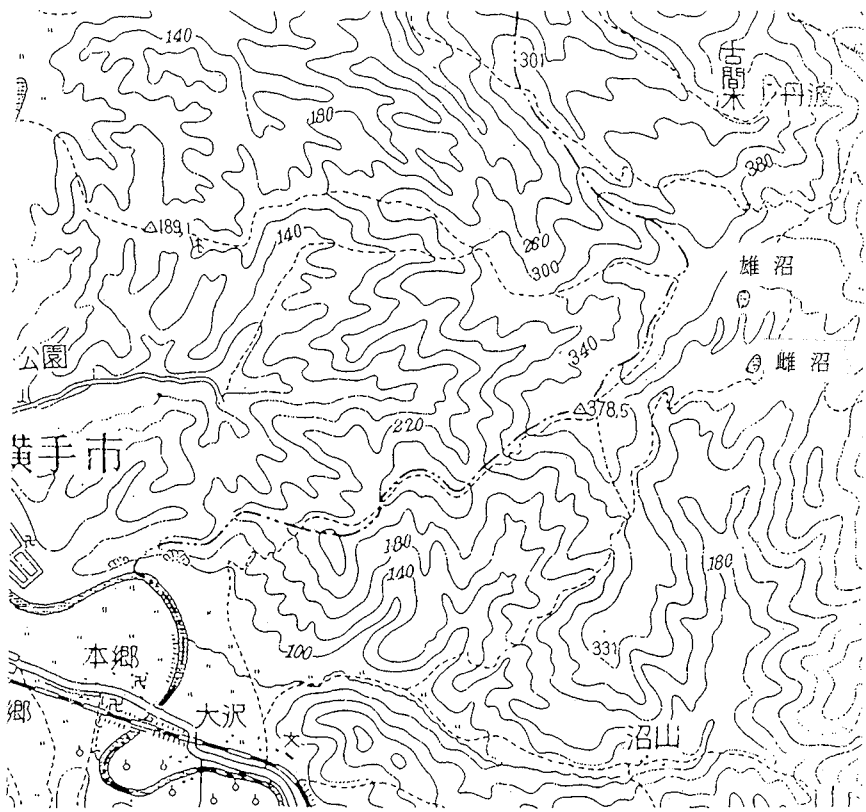
前項で述べた「きゃのづるさん」と清陵学院高校の裏の「十一面サン」の山との間を流れてくる川が沼山川で、その源流部に沼山があります。もともと、大沢村の一集落でした。地図てみるとかなり広い山あい集落であることがわかります。東に松川・落合から登る薊峠(ききさげ)があります。地名もあり、「沼山」集落は、その西側です。北側に沼がふたつ。この地図では見られません。



この「沼山」の古いすがたから見えていくと、次のようです。『雪の出羽路』（叢書二八四）《なゝのかみ杉》大沢編です。

○ 沼山邑 家員古十軒 今七軒

大沢の東に在る村なり。郡邑記に「天和三年（二六三）忠進開」と見えたり。ここに沼の平（ヌマノタヒ）といふ地（まき）に、雌沼（めぬま）雄沼（をぬま）とて二つの沼あるをもて沼山の名はあるなり。雄沼は大沼にしてさし亘（たゞ）二十尋（ひろ）ばかり、その深さ斗り（はかり）もしらず。此沼に綿の如なるもの浮きありく、そをもて綿沼とはいへり、いといとあやしき品（もの）なり。此処（こゝ）にいたりて雨乞すといふ。女沼（めぬま）の四五間四方にてさきやかか沼ながら、寒中（ふゆ）凍る事なきは清水（しみず）しずあらむといへり。



天和（てんな）の年の「忠進開」（ちゅうしんびき）を伝えています。新田開発には、「指紙開」（さしがまびき）と「忠（注）進開」（ちゅうしんびき）のふたつの形があり、沼山での「忠（注）進開」のように開発高（生産高）がそのまま開発者の知行高とはならなかった、といわれます。藩政初期には指紙開が

多く、その後の藩の財政事情と重なるなどして、天和の頃は忠進開にかわつたとされています。ここ沼山の開発者は、横手の給人かと思われませんが、くわしいことは不明です。が、沼山の人たちの菩提寺は観音寺と言われています。この寺は、茂木百騎で知られる茂木氏による開基とされますから、関係がありそうです。くわしいことは、やはり不明です。

次の地図に「雄沼」「雌沼」があらわされていて、なんとかわかりません。古い地図ですが、沼山へはいるあたりの「きゃのづるさん」の100呎の稜線がみられ、沼山集落の北には180呎の台地らしい稜線が見られます。愛宕山裏、諸子沢から登ると378・5呎の三角点に出ます。このあたりから、広い台地が眼下にひらけます。北に「雄沼」「雌沼」が見えます。『雪の出羽路』で真澄は「沼の平ぬまた」としていますが、この大きな谷の底の《平たい》からきた、《平たい》ともいえるし、大きな台地状ともみて《沼台》といわれるようになったのかも知れません。

この沼山の東側の尾根一帯は「風吹かぎき」と呼ばれているところで、防火線となっています。風が強く、いつも尾根でうたっているのです、この名があるのでしょう。ぴったしの名付けです。この稜線の東側が沼山、西側が横手睦成分となっています。「風吹かぎき」の名の示すように、気象条件に変化が激しく、竜巻などの発生が知られます。古老の話として、「沼台から、竜(たつ)、天サ上って行くけ…」と伝えられているほどです。秋から初冬にかけて発生しやすいといわれます。

